

『かみさまのけだものと 悪魔のけだもの』

グリム童話集より

小栗剛(キコ)

■登場人物

- ユキ 小学5年生の女の子。転校してきたばかりで不安がいっぱい。
狼さん かみさまが作ったけだもの
神 世界の創造神。
悪魔 その名をアザゼル。山羊の姿をした悪魔。
アダム 初の人間。男。
イヴ 初の人間。女。

【ユキとママのマンション】

真っ白な画用紙が散らばっている。その内の幾つかは絵が書いてある。

(狼や山羊の絵。)

洗面台。ユキが鏡に向かって何かをつぶやいている。

ユキ かみさま。かみさま。おねがいがあります。

遠くからママの声が聞こえる。

ママ ユキー。したくできたのー？

ユキ ママに聞こえちゃう。シーだよ。

画用紙の山羊に話しかけるユキ。

ママが現れる。

ママ まだ髪も結ってないの？

ユキ ママー。ユキ、ユキのおめめきらいい。

ママ また学校で何か言われたの？

ユキ 山羊の目みたいって。

ママ、笑う。

ママ 山羊の目はね、悪魔の目なんだって。
ユキ そうなの？

ママ 昔々。ある日のこと。山羊さんのおめめが見えなくなっちゃったんだって。
ユキ どうして？

ママ 悲しいことがたくさんあったから。
ユキ 悲しいこと？

ママ 悪魔がね。山羊さんかわいそうって、自分の目をあげたんだって。だから、山羊さんの目は 悪魔の目。

ユキ 悪魔って悪い人じゃないんだ！

ママ そうだよ。悪魔に会ったらどうする？

ユキ キスしてあげる。

ママ いい娘だ。じゃ、ママも会社行く準備しなきゃ。

ユキ ええー。もつとゆっくりしようよー。

ママ 駄目。遅刻したらママ怒られちゃう。ママはね、会社のしもべなのよ。

ユキ しもべー？

ママ、ユキの髪を結び終わり、自分の支度のために去る。

ユキ ママはあたしのかみさまなのに。しもべなんてやだねー。

ユキ、画用紙の山羊の絵を唾え、鏡に向かう。

ユキ まるで私はけだものみたい。

ユキ、画用紙を口から外し、

ユキ かみさま、かみさま。お願いがあるの。

ママ これは、私たちがまだ神話の世界で生きていた頃のお話。

ユキ 「神様のけだものと悪魔のけだもの」

【枯葉の舞う草原】

狼の音が聞こえる。

音楽フェードアウト。同時にゆっくりと明転。

白い狼がうろついている。

狼さん
神は。

狼さん、寒そうにしている。

狼さん
神はある日、すべてのけだものをお創りになりました。

冬。

狼さん
世界はまだ冬でした。今日のように、強くて小さな光が無数に降ってきていました。

神が現れる。

神
枯葉と雪に覆われた草原が、とても殺風景だったのだ。大地が風に殺されたような景色。その頃、世界には鳥しかいなかった。私が大地を歩く生き物たちを創ったのは、ただの気分すぎない。

狼さん
神は私を…狼を、最後から二番目に創られました。神は私を側に置き、それはそれはたいそう可愛がってくださいました。

神
私だって寂しかったのだ。
かみさま、お仕事をください！僕、働きたい！

狼さん
神
んん。いいよ。そばにいてくれれば。その毛皮を撫でさせておくれ。
はい。

狼さん、神に背中を向ける。

神
おお。よしよし。

狼さん
神
かみさま。
なんだい。狼さん。

狼さん
神
もっと激しいお仕事をください。
なんだ。こうしていることも立派な仕事だぞ。

狼さん
神
だって僕けだものですから。うずくのです。走ったり、かみついたり、殺したりしたい。なるほど。やはりお前は優秀なけだものだな。では、あそこに見えるだろう。

狼さん
神
鳥？
あれは増えすぎるとロクなことをしない。あれをいくらか殺してきてはくれないか。

狼さん
神
わかりました。

狼さん、意気揚々と立ち上がる。

神 これこれ。

狼さん はい！

神 よだれが出ておる。

狼さん えへ。

神 お前は本当にけだものだな。

狼さん かみさまがお創りになったんですよー！じゃ、鳥！殺してきます！

狼さん、元気に走り去る。

神

遙かなる草原を白い狼が走り抜けていく。そのしなやかな足が無数の枯葉を踏み破いていく音を聴いていた。そうしながら私は気付いた。ひとつだけ、けだものを創り忘れていたことを。

いつの間にか 悪魔がいる。

悪魔 かみさま。

神 悪魔か。悪魔がなんの用だ。

悪魔 あのけだもの、面白いね。血気盛んで、健康で、たくましい。そして何よりも血を見るのが大好きだ。俺はああいうけだもの、好きだね。

神 やらんぞ。

悪魔 くれよ。ありやあ、まるで悪魔のようなけだものじゃないか。俺にぴったりだ。

神 やらん。

悪魔 気に入ったんだ。頼むよ。

神 あれ以上に私が気に入るけだものがいればな。

悪魔 いいだろう。かみさま。あんたひとつだけけだものを創り忘れてるな。

神 なんだ。

悪魔 山羊。

神 いらん。

悪魔 何をおっしゃる。あれはいいぞ。うまい乳も出るし、何しろ可愛い。

神 あれは神を喰う。

悪魔 大丈夫だ。神を喰わない山羊を創る。とびっきり白いくてキレイなやつ。肌触りも最高だ。どうだ。その山羊とあの狼。とりかえっこしようぜ。

神 いらんと言っつておるって。

悪魔

物は試した。創るから、それを見てから決めてくれ。

神

悪魔よ。山羊なぞいらんのだ。私は。山羊は神を

悪魔

神を喰わない山羊を創る。約束するよ。

悪魔、意気揚々と去っていく。

神

悪魔の作ったけだものなど、ろくなものであるうはずがない。

【悪魔の家】

悪魔、「万物創生」という本を手にしながら山羊を創ろうとしている。

悪魔

ええと。アミノ酸とたんぱく質を多めに。よし！できたぞ。山羊め！なんて可愛いやつだ。

ユキ

私は悪魔のけだものとして、この世に生まれました。私は、

悪魔

山羊。山羊め！くうー。名前を付けてやろう。お前の名前は、

ユキ

ユキ。悪魔は私にユキと言つ名前を付けました。真っ白な雪にちなんで、ユキ。

悪魔

お前が世界で最初の 悪魔のけだもの。「山羊」だ。声を聞かせろ。

ユキ

めー。

悪魔

なんて可愛いやつだ！喰うか？草。喰うか？

ユキ、草を食へさせてもびっ。

ユキ

おいしい。ありがとう。

悪魔

しまった。

ユキ

どうしたの？

悪魔

可愛いすぎる。

ユキ

可愛くてごめんなさい。

悪魔

いや、いいんだよーそのほうが神も喜ぶし。

ユキ、悪魔の頬にキスをする。

悪魔

なんだよ！

ウキ 創ってくれた感謝だよ。くちをつけたくなっちゃった。

悪魔 こいつめ！もう一回してくれ。

ウキ 食べたい。

悪魔 え？

ウキ 食べたいよ。

悪魔 草？

ウキ あなた。

悪魔 …。喰えないぞ。

ウキ 駄目？

悪魔 悪魔だもん。たぶんね、食べるとよくないと思うよ。山羊の胃腸では耐えられないと思う。

ウキ そうなんだ。じゃあ、あきらめるほかないね。

悪魔 草がいいよ。そういう風に創ったから。お前のお腹。

ウキ じゃあ、草食べる。

悪魔 草原に行くといい。雪を掘り返せば無限に草が生えているからね。

ウキ うふふ。ありがとう！

ウキ、悪魔の家を出て行く。

悪魔 けだものめ。

【純白の草原】

雪が降り積もった草原に神と狼さんがいる。

狼さん

冬が深まると草原は純白に染め抜かれます。音の無い静かな世界。悪魔が山羊を創るといつてから、百回目の冬が来ました。悪魔はまだ私たちの元にやってきません。

神

寒い。側に来ておくれ。狼さん。

狼さん

今日は何を殺してきましょつか？

神

そうだな。

神、草原の彼方を見る。

神

随分と増えたと思わないか。

狼さん

山羊ですか？

神

ああ。真っ白い体をしているから、色が雪に埋もれて良く見えないが、あれは相当

狼さん
な数だぞ。どれもこれも悪魔に、悪魔にそっくりな姿をしている。
僕。殺したい。

神
まあ待て。あれだけたくさんいるのに、悪さをしない。殺す必要はない。ほら。はじ
めは煩わしかった歌声も、慣れてみれば可愛いではないか。

狼さん
僕は嫌いだな。

神
可愛いではないか。

狼さん
随分お気に入りですね。

神
まあそう言うな。

狼さん
もし今悪魔が現れて、僕と山羊を交換しようと言ってきたらどうしますか？

神
なんだ…。お前、

狼さん
やがて春が来ます。草原が芽吹いたら悪さをするに決まっています。殺すなら今の
ちです。

神
お前はけだものとして立派だ。しかし血を好みすぎる。気をつけなさい。

狼さん
はい。

神
狼さん。君は神に仕える神聖なオオカミだ。

悪魔が現れる。

悪魔
かみさま。

神
ひさしぶりだな。

悪魔
冬を、百は数えたか…。何をみておられるのですか？

神
いつ見てもいやな目だ。

狼さん
僕は知っていた。かみさまが悪魔の目を嫌がるわけを。だって。かみさまの目より、
あの悪魔の目の方が美しいんだ。

悪魔
どの山羊がいい？どれも名前が付いている立派な山羊だ。どいつもどいつも片っ端か
らおとなしくて可愛いぜ。

神
狼さんは手放さんぞ。

狼さん
多くの命を奪い、血を好み、血を流し、己の欲に逆らわず奔放に生きる悪魔、悪魔
の目は野生の美しさを宿していた。

悪魔
とぼけるな。俺の山羊を見ていたろう。欲しいんだらう。山羊が。

神
何故いままで姿を現さなかった。

悪魔
失敗だったからだ。

神 失敗？

悪魔 創る山羊創る山羊、かたつぱしから一匹残らず、可愛い。俺は天才だと思う。どれだけ手抜きで創っても可愛いのができちゃうわけよ。可愛くて可愛くて、手放したくなくなっちゃったんだよね。正味な話…。

神 なんだ、そりゃ。

悪魔 そういう意味での失敗。

神 だったらもう狼も欲しくないだろう。

悪魔 いや、あれはあれで欲しい。

神 やらんよ。そもそも交換の約束だろう。

狼さん 交換しちゃうんですか？

神 まてまて、まだ話のどちゅ…

悪魔 俺がどうして、今頃になって現れたか…。

神 なんだ。

悪魔 できたんだよ。本当の失敗作が。ついに、可愛くない山羊を創ることに成功したんだ！

神 可愛くない山羊？

悪魔 いらないからそれとその狼を取り替えてくれ！

神 いやだ！

悪魔 勝手な事を言うな！

神 勝手はそっちだ！不平等だ！

悪魔 ふびよ？

神 取引として成立しておらん。

悪魔 なんだ？

神 だから！お前は自分勝手な条件で、その！ああ…。悪魔に何言っても無駄か。

悪魔 いいから交換しろよ。

神 神を冒瀆するのか？

悪魔 うん。

神 そうだよな。

悪魔 すまんな。

神 とにかく見せてみる。その「可愛くない山羊」を。

悪魔 おう。いいだろう。いでよ。アダム！イヴ！

アダムとイヴが現れる。

悪魔 どうだ。可愛くないだろう。

神 そんな紹介の仕方があるか。

悪魔 ツガイで創ったから、たぶん結構増えると思う。あとね知能が高め。で、かみさま寄りに似せてみた。どう？

神 なんだけか。

悪魔 何？

神 嫌な予感がするが。でもなんか憎めない。

アダム かみさま。

イヴ よろしく。

神 安全か？

悪魔 まあキバも爪もつけてないしね。愛玩用で品種改良した山羊だから、そこそこ楽しめるはず。

アダム 楽しもうぜ。この世界。

神 若干ムカツク気もするが。

悪魔 気に入らなかつたら天罰与えれば、

神 そうか。

悪魔 うん。

アダム 言うこと聞くよ。

狼さん 駄目です！

悪魔 駄目なもんか。なあ、かみさま。取引成立だ。こいつは俺のもんだ。いいだろう？

狼さん 嫌だ！

悪魔 前から言おうと思ってたんだが。

狼さん なんだ。

悪魔 お前は血を好む。かみさまの失敗作だ。

狼さん 僕が！？

悪魔 悪魔といた方が、ふさわしいぜ。

狼さん かみさま！

神 狼よ。見てみる。このアダムとイヴを。こんな非力な山羊が私の世界を汚そうもの

か。私の傍らにいるべきけどものは、血を好まぬこのような山羊なのではないか。

狼さん かみさま…？

神 お前は血を好みすぎる。

狼さん かみさまの馬鹿！おたんこなす！

狼さん、ショックのあまり走り去る。

神 それから狼は悪魔から逃げ続けた。いくつもの冬が通り過ぎた。

狼さん 僕の心は悲しみに汚れた。真っ白だった体がどんどんと煤けて、枯葉の色に変わって

いった。

悪魔 俺は狼を追った。大地に飛び散る血を追えば、そこに狼の形跡があった。狼は世界中のけだものを殺しながら走り続けた。

狼さん 僕は苦しかった。悲しみだけではない、もうひとつの感情。嫉妬。かみさまの心を奪った山羊に対する、嫉妬。苦しい。苦しいよ。かみさま！僕は、あなたを殺したい！

悪魔 狼さんはけだものを越え、見るのもおぞましい魔物となった。

狼さん 悪魔！

悪魔 私よりも禍々しい、私でさえ身震いする新しい 悪魔。

狼さん 教えてくれ。

悪魔 何だ。

狼さん 神の殺し方だ。

ユキ 悪魔と狼さんは、かみさまを殺す方法を探して旅を始めました。旅のすがら、あらゆるけだものを殺しながら。かみさまが作った私たちの世界が段々と血に染まっていきます。やがて、真っ白だった世界に死んだけだものたちの血液の赤が染み込み、その血の温度で世界を覆っていた雪が溶けました。やってきたのは桃色の季節！たくさんの若草が芽吹きました。私たち山羊は、この季節を春と呼びました。いろいろどりの、春！私たちは毎日お祭りをしました。かみさまと一緒に！

神 これが世界の正しい姿なのかもしれないな。

ユキ かみさま！

神 ヌギ。お前は相変わらずとびつきり可愛いのがう。

ユキ ありがとう。

ユギ、かみさまにキスをする。

神 これこれ。よしなさい。

ユキ 草がおいしいので、楽しいです。

神 うんうん。それはよかった。

ユキ かみさま。世界を作ってくれてありがとう。

神 礼にはおよばんよ。アダムやイヴたちはどうした。

ユキ うん。一緒に楽しくやっているのよ。私たちのお乳が好きみたい。私たちのお乳でチーズやヨーグルトを創るのよ。私たちと違ってとても賢いの。

神 ふむふむ。

ユキ それでとても栄養がついて、強くなったのよ。たくさん増えたのよ。

神 悪さはしておらんか。

ユキ していないよ。それにね。それにね。山の木を使って、おうちを作ったの。

神 家を。

ユキ そろそろ町になるって言ってたわ。町ってなあに？

神 町か。それは。

ユキ なあに？

それは私にもわからんいう。私にも作れないものを、アダムたちは作るうとしておる。

ユキ すごい！

神 アダムたちは、とんでもない山羊だ。悪いことが起こらなければ良いが。

アダム、イウ、駆け込んでくる。

アダム かみさま！……！

神 どうした、アダム。ちょうどお前の話を…

アダム 狼だ！狼が現れた！

神 帰ってきおったか。

イウ 私たちの家が燃やされています！私たちの仲間の体が八つ裂きにされています！
たすけて！みんな殺されちゃう！！

神 準備は出来ておる。

アダム 本当ですか？

神 ドワーフたちのもとに向かいなさい。私の力を貸してある。

アダム はい！

イウ はい！

神 狼の吐く息は黒い炎となってアダムたちの町を焼き尽くしていた。その炎の温度が狼さんの嫉妬が生み出す温度だということを、捕らえてはじめて私は知ることができた。世界を焼き尽くさんとするこの禍々しい魔物は、そもそも私が創っただけなののだ。ドワーフに作らせたグレイプニルの枷で身動きの取れなくなった狼。血に濡れたその唇で、獰猛な呼吸を繰り返している。

狼さん、捕らえられている。

神 変わり果てたな。いったいどれほどのけだものを殺した。醜い姿だ。

返事はない。

神 苦しいか。

返事はない。

神 もはや言葉さえも失ったか。

返事はない。

神 憎しみは自分を苦しめるだけだ。そして残念ながら、憎しみでは神を殺すことは出
来ん。悪魔にそそのかされたか。

狼さん、呼吸を止める。

神 私も老いた。どうだ？お前を捕らえる事も、私だけの力ではどうにもならん。なさ
けないだろう？いずれ死ぬ。それがわかる。どういうわけか、この所急激に体が弱
くなつてな。神の仕事もそろそろ終わりだ。どうだ？一緒に死ぬか？

神、狼さんに触れる。

狼さん、自意識が戻る。

神 私が死ぬまで、そこで待っていてくれ。

神、去る。

ユキ、狼さんに近づく。狼さんの頬に触れようと手を差し伸べる。

狼さん、ユキの腕に噛み付く。

ユキ 食べる？

狼さん、ユキを睨む。

ユキ いいのよ。あなたが楽になるのなら。

ユキ、狼さんにキスをする。

ユキ 泣いてもいいのよ。

狼さん、涙を流す。噛み付いた腕からキバを緩め、語りだす。

狼さん

もう、戻れないかな。かみさまが可愛がつくれた色に。戻れないかな。いつぱい殺しちやったからな。いつぱい殺しちやった！ああ！抱きしめて欲しいな。なでなでして欲しいよかみさま！

ユキ、狼さんに微笑みかける。

ユキ おいしいミルクをあげるね。待ってて。

ユキ、狼さんから離れる。

ユキ お乳出してくるー！

悪魔が現れる。

悪魔

神を殺すけどものは、狼ではない。すまん。かみさま。やつぱり俺は悪魔なんだ。どうしても悪いことを考えてしまう。いつか仲良くなりたいたいものだが…。やつぱり悪魔なんだ…。あんたを殺すのが俺の仕事。やれやれだ。

イヴ もう私たちしかない。

アダム なんてことだ。

イヴ せつかくたくさん増えたのに。

アダム あの狼のせいだ。

イヴ あの狼を作った神のせいだ。

悪魔 その通りだ。

アダム、イヴ、手を繋ぐ。

悪魔 お前らは何度でも増える。

アダム 失敗作の山羊。

イヴ 可愛らしくない山羊。

悪魔

神を食う山羊。いや。お前達はもはや山羊ではない。

アダム、イヴ、抱き合う。

悪魔

人間だ。

アダム

こうして私たちは人間となった。

イヴ

神を憎みながら。

アダム

豚や牛や馬が私たちのしもべとなった。

イヴ

もう一度私たちが増えたとき、私たちにあの山羊は必要なくなっていた。

アダム

むしろ、私たちの草原を荒らす悪魔に見えた。

イヴ

悪魔と同じ姿。

アダム

禍々しい。

悪魔

人間は全ての山羊を滅ぼすことを決めた。増えた人間の一人が私に聞いた。

人間

どうしたらあの山羊を、一匹残らず殺すことが出来る？

悪魔

なぜ殺す？

人間

あれは私たちを脅かす。

悪魔

もはや私の入れ知恵など必要のない、悪いけどもの。

人間

けどもの。

神

けどもの。

ユキ

けどもの。

狼さん

けどもの。

アダム

もはや、神も

イヴ

悪魔も必要としない。

悪魔

美しきけどもの、人間。

狼さん

人間の一人が僕の枷を外した。人間は僕に、すべての山羊を殺すように命令した。

ユキ

狼さんは次々と山羊を殺しました。狼さんの体にはグレイプニルの錆びた鉄が食い込んでいたの。走り続けないとイバラのように体に食い込む。狼さんの黒い血が大地に飛び散りました。山羊を殺し続けないと、鉄のイバラは狼さんの肺に襲い掛かります。肺の破れたところから炎がはみ出しています。苦しいから！狼さんは山羊を殺し続けたの。そして、

狼さん

最後の山羊。

ユキ 食べる？

悪魔 さすがの俺も、心が痛んだ。

狼さん 食べないよ。

悪魔 狼は大量の血しぐきを上げながら笑った。ユキの体が真っ黒に染まる。俺は、ユキの目を。もうこれ以上は…。

悪魔、ユキの目に手を掛ける

ユキ 何をするの。

悪魔 もう見なくていいよ。

暗転。

美しい音楽。朝が訪れる。

アダム、イヴ、力を失った神を取り囲んでいる。

アダム 神よ。これは何度目の朝だ。

イヴ 神よ。これはあなたの罪だ。

アダム 神よ。あなたの目の前で多くの血が流れた。

イヴ 神よ。

アダム 神よ。

イヴ あなたは何もしなかった。神よ。

アダム あなたは見ているだけだった。

イヴ 何度も叫んだのに。

アダム 何度も祈ったのに。

イヴ 神よ。

アダム けだものは死んだ。最後はあなただ。

イヴ 私たちはあなたを殺す方法を見つけた。

アダム 私たちはあなたを必要としなくなった。

イヴ 私たちはあなたを殺す方法を見つけた。

アダム 神よ。

アダム、神の目を塞ぐ。

アダム
イヴ
次に生まれるなら、神よ。最早あなたも私たちのしもべだ。
私たちは、あなたを、信じない。

神、すべての力を失い、倒れる。

暗転。

再び朝が訪れる。

ユキがいる。ユキの目が見えている。

ユキ
見える。

ママ
ユキと迎える朝。私がこのマンションに決めた理由は、窓と鏡。朝の光が差し込むとユキの白い肌が鏡に、綺麗に映る。このマンションのユキが一番可愛いのです。可愛いという声の角度と光の温度、愛する娘の柔らかな髪をブラシで解かしてあげる。私の生活。

ユキ
ママ。

ママ
なあに。ユキ。

ユキ
私の目。

ママ
キレイな目よ。ぶっしたの？

ユキ
学校でね。悪魔の目みたいって言われたの。

ママ
悪魔の目？

ユキ
あと、山羊に似てるって。

ママ
あら。可愛いじゃない。山羊さん。

ユキ
ママ。私また、いじめられちゃうのかな。

ママ
大丈夫。

ユキ
本当？

ママ
今度はちゃんと、ママが守ってあげるから。

ユキ
うん。

ママ、
ユキの目を見る。

ママ
山羊の目はね、悪魔の目なんだって。

ユキ
そうなの？

ママ
昔々。ある日のこと。神話の頃のお話。山羊さんのおめめが見えなくなっちゃったんだって。

ユキ どうして？

ママ 悲しいことがたくさんあったから。

ユキ 悲しいこと？

ママ 悪魔がね。山羊さんがかわいそうって、自分の目をあげたんだって。だから、山羊さんの目は悪魔の目。

ユキ 悪魔って悪い人じゃないんだ！

ママ そうだよ。悪魔に会ったらどうする？

ユキ キスしてあげる。

ママ いい娘だ。じゃ、ママも会社行く準備しなまぢ。

ユキ うん。

ユキ、画用紙の山羊の絵を啜え、鏡に向かう。

ユキ まるで私はけだものみたい。

ユキ、画用紙を口から外し、

ユキ かみさま、かみさま。きいて。わたしのよくぼう。

神 言つてご覧。

ユキ だれよりもかわいくなりたい。

ママ かみさまが最後に創ったけだものは、少女でした。

**「神さまのけだものと悪魔のけだもの」
了**